

No	感染症(PT)	出典	概要
132	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	FDA/TSEAC Meeting 2006年12月15日	FDAは、米国で認可されたヒト血漿由来第VIII凝固因子製剤 (pdFVIII) の使用に係る潜在的vCJDリスク評価草案を作成した。FDAの評価モデルの結果は、血友病Aおよびフォンウィルブランド病患者に使用されるpdFVIII製剤の、vCJD感染リスクは非常に低いが、ゼロではないかもしれないことを示唆した。またTSEAC (TSE Advisory Committee) は、pdFVIII製品中のTSE除去の適切な閾値について議論した。TSE除去レベルにより、vCJD感染リスクは大きく変動することが示された。
133	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	HPA Press Statement 2007年1月18日	英国で輸血と関係した新たなvCJD症例(4例目)が、最近診断された。この症例は後にvCJDを発症したドナーからの輸血を受けた約9年後にvCJDと診断された。同じ供血者からの輸血は以前に同定されたvCJD1例とも関係していた。4例目の患者は以前からvCJDに暴露した可能性を知らされていた。4例目のvCJD感染症例により、輸血を介したヒトの間におけるvCJD感染リスクについての懸念が高まっている。4症例は全て、成分輸血に関係したものであり、血漿分画製剤による治療に関連した症例は今まで報告されていない。
134	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	HPA/Health Protection Report 1(16) 2007年4月20日	HPAにより進行中の研究でマウスにおいて歯科組織にTSE感染性があるとの知見が得られた。この結果は歯科用鍵および歯根管拡張器がvCJD感染の伝播経路になりうることを示す。英国歯科担当長官は歯髄拡張器および鍵を全ての患者に対し、1回限りの使用にするよう全ての歯科医に文書で通達した。vCJD伝播リスクを減少させるための注意である。また全ての歯科用装置について最高基準の汚染除去を行うよう忠告した。
135	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	HPA/Health Protection Report 1(3) 2007年1月19日	英国で4例目の輸血関連vCJD可能性例が診断された。この症例は供血後約17ヶ月でvCJDを発症したドナーからの赤血球輸血を受け、8年半後にvCJDを呈した。このドナーは3例目の輸血関連vCJD症例へのドナーでもある。4例目の症例はプリオン蛋白遺伝子のコドン129がメチオニンホモ体であった。まだ生存中である。
136	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	J Biol Chem 2007; 282: 35878-35886	トランスジェニックマウス(101LL)を用いた感染性実験の結果、TSE疾患の臨床症状と脳の空胞化という徴候を示すがPrPScのレベルが低いかもしくはイムノブロット法では検出されない動物の脳組織内に、高力価のTSE感染性が存在していることが明らかとなった。この結果はPrPScのレベルと感染価との間の相関性に疑問を投げかけるものであり、プロテアーゼK抵抗性のPrPをほとんどもしくは全く含まない組織が感染性となりうること、および高力価のTSE感染性を有していることを示すものである。
137	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	J Gen Virol 2006; 87: 2433-2441	4-6月齢時にBSE感染脳1gまたは100gを経口投与した乳牛を人工授精させ、出産後1週間以内と、授乳期間中10週間間隔で搾乳した。乳サンプルを遠心分離し、Bio-Rad Platelia ELISA法とSeprion-PAGE/Western blot法を用いて、BSEに関連する異常プリオンタンパクを分析した。その結果、ウシの乳の細胞分画から異常プリオンタンパクは検出されなかった。
138	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	J Gen Virol 2007; 88: 1048-1055	56頭の子牛に経口的BSEチャレンジを行い、4ヶ月毎に屠殺し、剖検動物のリンパ管ならびに末梢および中枢神経系に属する組織を免疫組織化学的方法およびイムノブロット法で調べ、PrPScの存在を分析した。その結果、PrPScは自律神経系を介して胃腸管から中枢神経系へ広がっていくことが明らかとなった。非自律末梢神経へのPrPSc浸潤は中枢神経系でのプリオン複製後の2次的な逆行事象であった。また、PrPScは感染後24ヶ月の動物の脳幹で検出され、以前の報告より8ヶ月間早かった。
139	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	J Gen Virol 2007; 88: 1379-1383	BSEを経口的に接種し、20~33ヶ月後に屠殺された無症候性ウシ由来の組織を、ウシPrPを発現するBoPrP-Tg110マウスに脳内接種し、感染性を評価した。その結果、無症候性ウシにおけるBSE感染性は神経系、パリエル板および扁桃腺に局限していた。パリエル板と扁桃腺における感染性は分析された全ての時点で検出されたが、神経組織における感染性は27ヶ月後に検出され、脳幹における感染性は33ヶ月後に著しく増加した。脾臓、骨格筋、血液および尿では感染性は検出されなかった。
140	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	J Gen Virol 2007; 88: 2890-2898	PMCA(Protein misfolding cyclic amplification)法を用いてSc237感染ハムスターにおけるPrPScの尿中排泄及び血中レベルの時間経過試験を行ったところ、疾患末期に高率のPrPSc排泄を認めた。経口投与後、PrPScは全てのバフィーコート検体中に存在し、症状出現期のハムスターの血しょう検体の大部分に存在した。尿中には経口投与後数日間はPrPScが排泄されたが、それ以降末期まで検出されなかった。TSE感染動物の尿中でPrPScが生化学的に検出された初めての報告である。
141	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	J Med Microbiol 2007; 56: 1235-1242	TSEの病因におけるspiroplasmaの役割について調べた。Spiroplasma mirumをシカに頭蓋内接種したところ、1.5-5.5ヶ月後にTSEの臨床症状を発現し、用量依存的に海綿状脳症を呈した。反芻動物への頭蓋内接種後のTSE感染脳から鶏卵胚培養でspiroplasmaが分離された。これらのspiroplasmaをヒツジとヤギに頭蓋内接種したところ自然発生TSEに酷似の海綿状脳症が誘発されることが確認された。
142	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病	J Neurosci 2007; 27: 6965-6971	数種類のPrPTransジェニックマウスへ伝達中の分子および神経病理学的性質を分析する事により、BSE L型と呼ばれる非典型的分離株の特徴を調べた。それらの分離株はウシPrPマウスを含む他の系統ではBSEと異なった表現型特徴を保持していたが、予期せぬことに、ヒツジPrPを発現しているマウスに伝達した時、BSE型PrPの性質に非常に似た性質を獲得した。種の壁の通過とプリオン株の多様性との関係がさらに注目される。